



「子どもが生きる力を付けるために親ができること」工藤勇一著より引用

叱るときは「子ども基準」で考えよう

叱るときには、その子が叱られっぱなしにならないようなバランス感覚が必要ですが、大切なのは、**叱るときに「親基準」にならないようにすること**です。保護者が自分の中で勝手に「ここまでは許す」「ここからは許せない」と線引きをして、その線を越えたら子どもを叱るというやり方をすると、どこかでひずみが出るでしょう。

たとえば、2人兄弟のご家庭の場合。「親基準の線引き」で叱る・叱らないを考えると、兄弟でも能力差はあり、できること・出来ないことに個人差がありますから、もし片方の子どもだけできないことが多かったとすれば、一方だけがやたらと叱られ続ける、ということにもなりかねません。また、発達に特性のある子どもは、感情のコントロールが他の子どもたちより苦手なことが多いです。それなのに、「親基準の線引き」で判断すれば、その子は叱られ続けることになってしまいます。

自分の子どもにはついつい感情的になってしまったり、その感情を引きずってしまいがちになります。それでも、**叱るときは一度冷静になり、叱られる本人、つまり子ども基準で伝え方を考えましょう。厳しく叱るということは、けっして感情的に声を荒げることでも、脅すことでもありません。もちろん体罰をふるうことは断じてありません。**

子どものありのままを受け入れてから、解決策を考える

日本では、子どもが何かをできなくて叱るときに「頑張ればできる」というような精神論をついつい口にしてしまいがちです。「頑張ればできるんだから、あなたもやりなさい!」といった言葉です。しかし、人は心的に安全な状態でないと、自分をうまくコントロールできません。叱責すればするほど悪循環におちいるだけで、いい結果をもたらすことは稀でしょう。

子どもに成長してほしいと願うのであれば、叱ったり、精神論を説いたりするのではなく、「そもそもうまくできないのが当たり前なんだよ。でも、もしそれであなた自身が困っているなら、工夫して変えていかないといけないよね。どうすればいいと思う?」というような、安心感を与える言葉かけが必要です。

人はそれぞれ違います。同じ屋根の下で育った兄弟でも、まったく性格が違うということはよくあることです。保護者は子どもを人と比べないで、その子のありのままを受け入れる努力をし、どう支えていくかを考えましょう。

子どもが充実した日々をおくるために！

- 子どもと積極的に対話しましょう
- 遊ぶときは思いっきり遊ばせましょう
- やったことのない事にチャレンジさせてあげましょう
- 自ら計画を立てて学習することを支援しましょう
- 学校の部活動や学校外の活動を応援しましょう